



❁ とりとめのない話 ❁

先日、好き嫌いの話になった。給食で残されることが多い野菜を、双子の甥っ子はいつもモリモリ食べてくれて保育士さんは嬉しかったらしい。ピーマン、セロリ、ニンジン等々、子供達が苦手な野菜は多数。野菜嫌いの子供も増えている中、甥っ子は何でも食べるし、むしろ野菜好き。母が言うには、私も妹もそうだったようだ。幸いアレルギーもなく、好き嫌いなし、蜂の子やイナゴも抵抗なし、何でも食べた。

アレルギーで食べられないのは別として、好き嫌い、特に、食わず嫌いはよくないなと思った。知らないだけ、苦手だと思いついていてだけで、調理の仕方次第で食べてみれば好きになることもあるだろうし、逆にどうやっても駄目なこともあるかもしれない。いずれにしろ、まずは試してみる事が大事だと思う。



今年7月、「長野県職員 建設女性の会」が設立された。建設部、農政部、林務部など建設系の女性技術職員有志で構成された組織で、職員同士が交流・連携し、情報の発信、建設産業の活性化に繋がる活動を推進していく。

先月、ワークショップが開催され、「建設産業の担い手を確保するためには」というテーマで話し合った。各々お菓子をつまみつつざっくばらんに対話を楽しむ中、自分はなぜこの業界に入ったのか思い返した。



中学3年になり進学先をどうしようか考えていた頃、ご近所から高専の話聞いた両親が「こんな学校もあるよ」と教えてくれた。実家から通学できる場所ではなかったため寮生活は必須、知り合いもない。地元を離れひとり未知の環境に飛び込むことに不思議と不安はなく、むしろ魅力を感じた。詳しく調べるうちにますます興味を持ったが、問題がひとつ。機械や電気、情報系が大の苦手だった。そんな世界でやっていく自信は微塵もない。ただ



ひとつだけ異色を放つ科があった。環境都市工学科、いわゆる土木科だ。この学校に行くならここしかない、単純に“環境都市”という言葉にも惹かれ、進学を決めた。

思えばこれがきっかけだった。学んでいくうちに魅力を感じるようになり、学んだことを活かしたいと将来を考えるようになった。そして今に至っている。当時の選択がなかったら、今はなかったかもしれない。

話を聞くと、似たような声はちらほら。はじめから明確な意思を持っている人もいるだろうが、そうではない人は多い気がする。きっかけはどうあれ、踏み入れたらきっと新たな発見があるはず。それが良いのか悪いのかは別として、踏み入ることがなければ始まらない。僅かでも一時でも踏み入ることが大事なのだ。

ただ、それが難しい。どうやったら踏み入ってもらえるのか、興味を持ってくれるのか、結論がまとまるはずもなく、模索は続く。



話は脱線するが、なぜこの業界に入ったのかという話題の中で、女性ばかりの環境が苦手だったからという声があった。女性同士のトラブルはめんどくさいし、嫌。建設業=男社会のイメージも手伝って、建設産業に興味を持ったという。そう言われると、私の勝手な思い込みかもしれないが、この業界の女性はサバサバした性格の人が多い気がする。私はそれが心地いいし、気が合う人も多い。

徐々に増えてきているとはいえ建設産業界の女性は少ない。だが、それが魅力につながることもある。ワークショップを眺めていた男性が興味深いとつぶやいていた。



年々、食わず嫌いが増えていっているように感じる。食べ物に限らず。無難なもの、同じものばかり選んでいては世界が狭まってしまう。マイナスも見方を変えたらプラスに変わる。まずは試してみる事。出されたものは何でもモリモリ食べ元気に育つ甥っ子達を見て自分を見つめ直す今日この頃である。

(小松 美緒・長野県建設部 砂防課 砂防係 主任)